

YUI(結い)は、会員の皆さまと私たちを結ぶ、アジア砒素ネットワークの会報誌です

YUI

NO.56
YUI-ASIA
ARSENIC
NETWORK

2018年5月10日発行



撮影者：土井利幸氏 撮影日：2017年7月29日
撮影場所：タイ / チェンライ県パーン郡ドンナコン村



滋賀県永源寺ダム



バングラデシュ / ジナイダ県の脱穀風景

研究者や NGO 関係者による共同研究(東京 / 星槎大学助成)
アジア地域の水資源共同管理から展望する共生社会～日本、タイ、バングラデシュの
水資源管理の現場から～に AAN は参加しています。

CONTENTS

- P.02-03 バングラデシュの高濃度砒素汚染地域における安全な飲料水の確保事業完了報告 矢野・寺田
- P.04 安全対策研修に参加しました 石山民子
- P.05 AAN資料室 1065点の資料を収集・保管 川原一之
- P.06-07 川原一之さんの聞き書き「山峡のシンフォニー」を終えて 西日本新聞 中山憲康
- P.08-09 Activities in Bangladesh (for Japan)
- P.10 事務局報告
- P.11 会費報告・Kayogram
- P.12 国内活動報告、総会のご案内・寄付のお願い、お仲間になりませんか

Facebook 更新中。Ajinomoto Adolescent Nutrition Promotion Project で検索を！



バングラデシュの高濃度砒素汚染地域における安全な飲料水の確保

プロジェクト担当 矢野靖典・寺田佳代

私たちはこの2年間（平成28、29年度）独立行政法人環境再生保全機構から「地球環境基金」の助成を受けて、高濃度に砒素汚染された井戸水の砒素を除去する装置をAANバングラデシュ支部のスタッフと開発しました。現在、バングラデシュで高濃度砒素汚染井戸水を飲料水基準値まで砒素を除去し、おいしい飲料水を供給しております。そのプロジェクトを以下に紹介いたします。



（1）助成活動開始時に解決したかった課題とは？

砒素汚染対策から取り残されている高濃度砒素汚染地域を対象として、井戸水から高濃度砒素を除去する高度な技術（Multi-type GSF、後述参照）を確立し、安全な水を供給すること。

（2）助成期間中の活動を通して達成したかったこと（アウトカム目標）は？

高濃度砒素汚染地域（2県）にMulti-type GSFが建設され、その供用性と普及性が確認されること。また、両県で計約240世帯（1,200人）が安全な水を得ることができること。

（3）課題解決のために取り組んだ内容は？

6基のMulti-type GSFを建設し、原水の砒素濃度は0.5～0.6 mg/Lと非常に高濃度であったけど、いずれも0.01～0.03 mg/Lという安全な飲料水が得られた。村人は安全でおいしい水が得られて、非常に喜んでいる。また、ワークショップを開催して、ローカル政府・NGOへのMulti-type GSF普及を図った。

（4）2年の活動を振り返った実感

Multi-type GSFには古鉄を砒素除去材として用いるが、まず溶けやすいものを選ぶための実験が行われた。次は、Multi-type GSFの性能を調べるために、モデル実験、実用規模の実験、そして供用中の性能実験が行われた。それらは、AANバングラデシュ支部のスタッフとの協働事業であった。データや評価のやり取りは主と

してE-mailで行なわれた。苦労したけど、現地スタッフはよく成長した、というのが実感である。

(5) 苦労した点と工夫した点

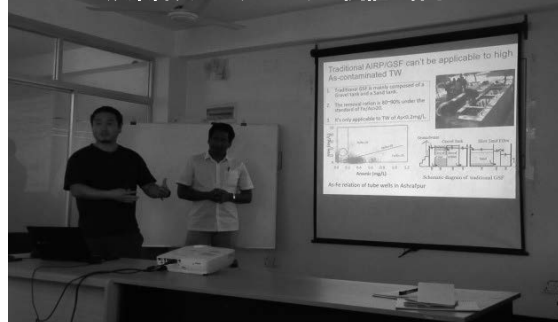
Mu-ti-i GSFの性能チェック等のために、現地スタッフとメール上でデータ&評価のやり取りをするが、その際に、相手の理解度を確かめるのに時間がかかったこと。また、データの分析結果をメールで伝える際に、こちらの考えを詳しく述べて向こうの意見を聞く。それを繰り返し行い、技術レベルの向上を図った。技術移転の原則と判断した。

(6) 今後の活動の方向性や取組み予定・抱負

Mu-ti-i GSFでは砂槽に微小濃度の砒素が蓄積している。この1年間の供用実験では砂槽はまだ限界に達しなかった。しかし、これは将来、起こる可能性があり、メンテナンス上の大きな課題となる。今後3年間で現地に技術移転を行いながら、18



成果普及ワークショップ開催の様子



基のMu-ti-i GSFを設置する予定である。この中でこの課題を解決し、それを通じて、高濃度砒素汚染地域において持続性のある安全な飲料水を供給していきたい。

Mu-ti-i GSFとは？

右ページの写真の各タンクには砂利(Gravel)と砂(Sand)が入っています。砒素を含んでいる井戸水を砂利槽と砂槽に通すだけで砒素が除去されます。GSFはGravel Sand Filterの略称です。バングラデシュの地下水には鉄分が多く含まれています。その鉄分は曝気すれば赤茶色となって沈殿しますが、その際砒素も巻き込んで沈殿します。沈殿物は砂利の間隙にたまりまゝです。砂利でろ過された水は最後に砂でもう一度ろ過されて、きれいな水となります。

GSFは宮崎大学とAANで開発されたもので、バングラデシュでは100基余りが設置されています。しかし、砒素の除去効率率は80〜90%のため、低濃度の砒素汚染井戸(砒素濃度が0.2mg/L)にしか適用できませんでした(バングラデシュの飲料水基準は0.05mg/L以下)。バングラデシュではなお、1,900万人の人々が安全な飲料水を得ることができていません(20年前では3,900万人でした)。その原因の1つは高濃度砒素汚染井戸に対する砒素除去装置がなかったからです。

高濃度砒素汚染水に対しては地下水に含まれている鉄だけでは砒素は十分に除去されません。そのため、屑鉄を入れたタンクと砂利タンクをこれまでのGSFに追加しました。それで、Mu-ti-i GSFと呼んでいます。



カリヤニ村にて(左から 横田代表、フィールドワーカーのモジヤフォー・ホセインさん、寺田佳代)

安全対策研修に参加しました

理事・スタッフ 石山民子

私が初めてバングラデシュを一人旅したのは一九九五年頃。誰かがアレンジしてくれるグループツアーと違い、ローカルの乗り物で移動し、自分で必要な買い物をし、お店で電話を借り。すべて自分一人で判断し動かなければなりません。道をぼんやり歩いていたら目の前に大きな穴が開いていたり、デモに巻き込まれそうになったり（いずれもよくある）。当時、外国人の女性はとても目立ち、じろじろ見られたり、囲まれたり、体を触られそうになったり、緊張の連続でした。いつしか、一歩外に出たら、常に神経をとがらせ、用心するようになりました。これは日本にいたら決して身につかなかった習慣でした。

それから二十年後の二〇一五年、保健プロジェクトで村の女性たちに体操の仕方を教えていた時、バングラデシュの状況が確実に変化していることを肌で感じました。継続的な経済成長の恩恵を受けて人々の生活も少しずつ安定し、女性の社会進出も進む中社会的制約も和らいだように見えました。二〇一五年秋、「今までみたいに緊張感を張り巡らせなくても女性が外を歩ける社会が来た」と実感したことを記憶しています。

後から考えれば、それは、過激派グループによる一連の事件が始まったころでした。二〇一六年七月のダッカでのレストラン襲撃事件を境に、私たちバングラデシュを訪れる日本人を取り巻く環境は二十年前よりもむしろ厳しいものになりました。

二月十六日、東京市ヶ谷のJICA研究所にて安全対策研修が行われ、横田代

表、宮崎事務所の寺田さんとともに講義、実技研修に参加しました。実技では襲撃を受けたときの伏せ方、ほくく前進の仕方とも体験しました。「友達三人と一緒に買物をしていたはずが、気づいたら友達三人が犯罪者に拉致されていた」というロールプレイを見せてもらい、衝撃を受けました。用心深さを身に付けてきたつもりでしたが、自分の行動も隙だらけだったと反省しました。

写真は外務省が発刊した漫画の海外安全対策マニュアル「ゴルゴ13 * 外務省」です。本の中で、外務省がゴルゴ13に安全対策を依頼した理由について「うさぎのように臆病な人間だから」とありました。小さい頃は、暗闇、孤独、いろんなものが怖かったのに、大人になるとそうした感覚はマヒしてしまいます。怖がりであること、用心深いこと、そういう人として欠かせない感性を研ぎ澄ませつつ、かつ自然体でふるまえるようになりたいものです。



AAN資料室

一〇六五点の資料を収集・保管

川原一之(AAN理事)

宮崎市役所から約一キロ西に行ったところにアジア砒素ネットワーク(AAN)本部事務所の入っているみやざきNPOハウスが建っている。四階建てのこの建物は、もとは宮崎県企業局の独身寮だったのだが、入居者が減って使い道に困った県が、市内のNPOに共同で使わないかともちかけて、二〇〇三年十月から約二十団体が事務所として使い始めた。それまで自前の事務所をもっていなかったアジア砒素ネットワークは、二階の二〇八号室と二〇七号室の二部屋を借りると、畳だった部屋を板ばりに、壁も白色にはりかえて、使い勝手のよい事務所につくりかえた。改装資金は、その年十月三十一日に受賞した「日韓国際環境賞」(毎日新聞社、朝鮮日報社主催)の副賞をあてた。



資料室兼会議室として整備された207号室

二〇八号室は、アジア砒素ネットワークの活動を統括する本部事務所。二〇七号室は、アジアの砒素汚染地を結ぶ「ネットワークセンター」として出発した。ネットワークセンターの目的は、①土呂久・松尾の歴史を整理するとともに、アジア各地の砒素汚染調査・対策に関するデータを集積すること、②アジア各地にネットを広げ、砒素汚染の解決をめざして情報を交換し合うこととされた。現在も、土呂久資料を収集し、その歴史を整理する作業は進んでいるのだが、アジアの砒素汚染資料の集積は、

二〇一三年ごろまでつづいたあと小休止していた。この活動を再開するために、四月に入って二〇七号室の大掃除をおこなって不要な書類を廃棄し、購入したスチール製書棚にナンバーをふった収集資料を並べると、二〇七号室は、アジア砒素ネットワークの資料室・会議室の顔を現してきた。

二〇一八年四月二十四日現在、データベース化されてコンピュータに入力された資料は千六十五点。ビデオやDVD・CDは左のロッカー、論文は右のロッカー、書籍は左の書棚、報告書と雑誌とパンフレット類は右の書棚に配置した。前スタッフの浅尾歩さんとボランティアの林裕美子さんが考えた分類法に従って、全資料には分野・報告形態・番号を書いたラベル(赤・緑・黄・白)が貼ってある。

分野は、1 砒素、2 水、3 環境・公害、4 アジア、5 NGO、8 組織紹介、9 その他。

報告形態は、A 書籍、B 報告書、C 論文、E 雑誌、F パンフ・ブックレット、G ビデオ/DVD H その他。

ラベルの色は、A 書籍が赤、B 報告書が緑、C 論文が黄、E 雑誌、F パンフ・ブックレット、G ビデオ/DVDは白になっている。

たとえば、インド・西ベンガル州の砒素汚染を最初に報告したK. C. シャハ医師の「Arsenicosis in West Bengal」は赤ラベルに1A10の番号がうたれて、左側の書棚の最上段に並んでいる。土呂久公害が発見された直後のドキュメント映画「咽び唄のさと 土呂久」(製作・映像集団エランヴィタル)のビデオとDVDは、黄色のラベルに1G01の番号をふって、左側のロッカーのいちばん上に収納してある。

資料室に収集・保管されている資料のデータベースは、近くアジア砒素ネットワークのホームページで公開することになっています。閲覧を希望される方は、アジア砒素ネットワーク本部事務所までご連絡ください。

アジアの砒素汚染関連の論文等を執筆されたときは、アジア砒素ネットワーク事務所へ三部送ってください。資料室に大切に保管いたします。

川原一之さんの聞き書き

「山峡のシンフォニー」を終えて 中山憲康

アジア砒素ネットワーク（AAN）理事で記録作家の川原一之さんの人生を追った西日本新聞の聞き書きシリーズ「山峡のシンフォニー」を二〇一八年三月末に終えました。昨年十二月十五日から三カ月半、全九十回の連載でした。朝日新聞記者となった川原さんがどのように土呂久と出会い、土呂久の記録者、支援者としての第二の人生をどう歩んだのか。その後、アジアの砒素対策支援を経て宮崎に戻った川原さんが今、何を目指そうとしているのか。今年七十一歳を迎えた川原さんに、人生のエッセンスを振り返ってもらいました。

なぜ、新聞記者をやめて土呂久と歩んだのか？

聞き書きシリーズは、素朴な問いから始まりました。「川原さんは、なぜ新聞記者を辞め、土呂久とともに歩む人生を選んだのだろうか」。深い内面的な理由を知りたかったのです。答えに

近づくには、じっくりと時間をかけて話を聞きましょう。ありませんでした。それが聞き書きを企画した動機であり、同時に目的となりました。



聞き取りはダイニングでつづけられた

年末の二十八日、川原さんからメールが届きました。「先日の取材で聞かれた、少年時代に友達と遊んでいた戸畑市中原（現北九州市）の狭い路地のことをどう表現するかですが、あれは僕の『原っぱ』でした」と伝えてくれました。福岡の絵草紙作家、山福康政さんの著書『原っぱに風が吹く』を読んだ時に感じたことを思い出したのです。そして、段ボールにしまっていた九十九冊の日記を取り出して、板の間に並べたそうです。中学二年から二〇〇〇年にバン格拉デシュに出发するま

幸運な巡り合わせでした。二〇一五年夏、二十年ぶりに宮崎勤務となった私は、翌一六年春にバン格拉デシュの拠点を引き払って宮崎に戻ってきた川原さんを待ち受けることができました。土呂久について一度きちんと学びたい。そう考えていた私は、AANが一六年に企画した川原さんの講座「土呂久に学ぶ」に申し込み、年十回の講義全てとはいきませんが、可能な限り出席しました。

一六年は土呂久訃告発表から四十五年という節目の年でもありました。地元の宮崎日日新聞では連載企画をシリーズで展開し、西日本新聞では十一月十三日の告発の日前後に企画を組みました。十二月下旬になって、ようやく川原さん自身を取材する機会を得ました。生い立ちから父、母のこと、学生、新聞記者時代のこと、記録や支援の取り組み、アジアでの活動などについて聞きましました。当初から「聞き書きシリーズ」を念頭に置いたアプローチでした。

キーワードは「原っぱ」

年末の二十八日、川原さんからメールが届きました。

「先日の取材で聞かれた、少年時代に友達と遊んでいた戸畑市中原（現北九州市）の狭い路地のことをどう表現するかですが、あれは僕の『原っぱ』でした」と伝えてくれました。福岡の絵草紙作家、山福康政さんの著書『原っぱに風が吹く』を読んだ時に感じたことを思い出したのです。そして、段ボールにしまっていた九十九冊の日記を取り出して、板の間に並べたそうです。中学二年から二〇〇〇年にバン格拉デシュに出发するま

で書き記した四十年近い記録です。記憶をひもとく貴重な資料です。正月休みから、重要な部分を抜き出す作業を始めると記してありました。

「原っぱ」は川原さんの人生を理解する重要なキーワードでした。実際は、川原さん家族が暮らしていた公務員宿舍横の幅三メートル、長さ四十メートルの細長い路地のことでしたが、小さい子にはそれなりの空間だったのでしょう。五、六人で遊ぶ三角ベースのメイン球場であり、実況中継のまねごとをしながら野球をした話を川原さんは楽しそうに語ってくれました。近くのようなかん屋では、あそこを練る台で卓球をし、休日には大人たちが縁台将棋に熱中していたそうです。原っぱとは、居心地の良い時間と空間が詰め込まれた川原さんの原風景を表す象徴的な言葉でした。人格を形成する価値観の源泉もここにあったのかもしれない。原っぱは山峡のシンフォニーを貫く重要な軸となりました。

聞き書きが一七年十二月に始まり、プロローグ後の川原さんの生い立ちは、この「原っぱ」の話から始まりました。そして、原っぱの仲間からひとり離れ、国立大付属中に進学した川原さんは、仲間を裏切ったような負い目を感じるようになったのです。進学コースのルールに自分を乗せた父親への反発にもつながっていききました。その後もずっと、川原さんの胸の底に、原っぱへの回帰願望と権威への反発が漂い続けていたように思います。



狭い路地が「原っぱ」だった



田中さんのテーマソングは任侠3部作だった

「川原君、土呂久のルポを書け！」

ある時、実際は苦勞しているはずの川原さんが、佐藤鶴江さんや数夫さん、鶴野秀男さんなど、土呂久の人たちのことを楽しそうに語る姿を見ていて、胸にストンと落ちるものがありました。八十九回目で川原さんが語った言葉が全てです。「経済面や健康面では、何度も危機に陥りました。それでも今、充実した人生と思えるのは、戻ると選択した『土呂久』が僕にとつての『原っぱ』だったからです」。もし新聞社を辞めていなかったら、川原さんには別の大きな活躍の場があったのかもしれない。それでも、川原さんは、人生の中で最も居心地の良かった「原っぱ」を選択したのです。土呂久は第二の原っぱでした。

朝日新聞の記者時代、宮崎支局長だった田中哲也さんから、突然に土呂久のルポを書けと命じられたこと。低額補償を押しつけられた知事あつせんでは、近くまで迫りながら患者を支えられずに大きな悔恨を残したこと。宮崎から転勤した後訪れた土呂久で鶴江さんから不意に掛けられた

「そんな声は川原さんじゃないですか」という言葉……。そこには、

土呂久の磁場に次第に引き寄せられていく川原さんの姿がありました。その人生にはシナリオがあるのではないかと考えたぐらいいました。

もう一つ、川原さんを描きた



土呂久公害を次世代に伝える時代になった

まった二〇年から長く続く土呂久や被害者の日常を聞き取りし、「口伝 亜砒焼き谷」にまとめ、それ以前の石器時代からの土呂久の歴史を取材して「浄土むら土呂久」に書き記しています。川原さんの人生をフィルターにして、土呂久の全体像を概観できるのではないかと、思っていたのです。実際にその通りでした。それは、川原さんの土呂久に対する思い入れの深さに比例しているように感じました。

公害を正の歴史に昇華させる

土呂久に関しては、被害者や支援者の手元にまだたくさん記録や資料が残されているといえます。川原さんや、元土呂久鉱害問題を考える会の青木亘さんが資料の再収集、整理に取りかかっています。こうした資料を保管、展示する資料館ができれば、どんなにすばらしいでしょう。

私は、ちょうど水俣病公式確認五十年だった二〇〇六年に水俣支局に赴任しました。かつて不知火海に突き出ていた岬の丘には、国、熊本県、水俣市の資料館など水

かった理由があります。川原さんは、いわゆる鉱毒事件史、一九七一年の鉱害告発から九〇年の最高裁和解までの土呂久の患者、支援者の闘争史に関わっただけではありませんでした。土呂久鉱山で亜

俣病関連施設が並んでいました。県の補助を利用して、公害を学ぶ小学生たちが県内各地から見学に来て、語り部の話に耳を傾けていました。今でも続いているそうです。負の歴史に真正面から向き合い、教訓をしつかりと吸収し、正の歴史へと昇華させる。そういう新しい動きが土呂久を囲む地域に起きることを願っています。

奇しくも「山峡のシンフォニー」が終わった三月三十一日は、西日本新聞が宮崎、鹿児島両県で新聞を発行する最後の日でした。締め切りに追われながら連載をやり終えた安堵感と充実感、一方で南九州での新聞発行休止に立ち合うという切なさや交錯する複雑な思いでこの日を迎えました。私にとつて一生忘れられない日になりました。

（筆者は、最後の西日本新聞宮崎総局長）

「山峡のシンフォニー」を読みたい方は、アジア砒素ネットワークの事務所まで Email（アドレスは裏表紙に記載）でご連絡ください。

若い土呂久が過疎と闘う物語に期待する



■給水施設持続的利用のための環境教育および維持管理技術支援プロジェクト(応用地質研究会委託事業)

12月29日～ 応地研から雁沢夏子氏が来バシ、これまでに修繕した代替
1月2日 水源装置18基と学校での啓発プログラムを2校で視察。
1月1-19日 啓発ブックレット『水とその利用のしかた』を使って4校で
水利用に関する授業をおこなう。



2月23-24日 応地研の3専門家と今期の活動を総括し次年度の計画について意見を交換する。

活動記録 2017年 12月～3月

■PEER プロジェクト (パート2)

砒素除去装置から排出されるスラッジの環境に与える影響を最小限にするための維持管理方法を普及させることを目的にしたプロジェクトで、2018年6月まで延長されている。

ケアテーカー研修： ジョソール県内にある砒素除去装置12サイトで研修（1月中4回実施、24人が参加）。すべてのケアテーカー研修を終える。

トレーナー研修(ToT)： DPHE やローカル NGO からの参加者に砒素除去装置の維持管理方法を知ってもらい、地元のケアテーカーをサポートできるようにするのが目的（1～2月中3回実施、62人が参加）。

ユニオン議会への研修： 議長と全議員、書記官に定期的な維持管理の重要性について認識してもらい、地元のケアテーカーをサポートできるようにするのが目的（1～2月中5回実施、71人が参加）。

■ユニセフ「砒素の安全なユニオン確立プロジェクト」

12月26日 シレット県ゴワインガート郡で実施してきたプロジェクト。最終段階となり、ダッカでユニセフ、DPHE、AAN ともう二つのパートナーNGO とで総括会議。AAN の場合、残念ながら対象6ユニオンのどこでも「砒素の安全」を宣言するに至らず。

12月27日 ゴワインガート郡議会ホールでプロジェクトを終了するワークショップを開催。

■ユニセフ「マンガン除去技術調査プロジェクト」

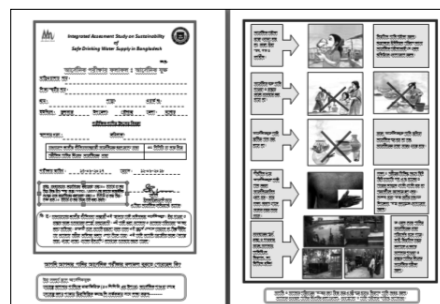
- ✓ 当初2017年9月末で終了予定だったが最終的には2018年6月末まで延長されている。
- ✓ 12月末までに第2フェーズで予定されていた15基のマンガン除去装置建設完了。10基はハンドポンプのみで、5基はハンドポンプ+電動ポンプ付きで浄化した水をタンクに汲み上げる方式を採用している。
- ✓ MRTプロジェクトで設置したすべてのサイト（19カ所）で3月中、利用者世帯には水の安全管理について、ケアテーカーと地元のメカニックには維持管理について研修を実施。



■給水施設の長期的持続利用に関する総合調査プロジェクト

ミシガン大学博士課程の学生との共同研究プロジェクト。

- ✓ 1月は対象地域で173件の水質証明書を配布。証明書には3つのカテゴリーがある。すなわち①緑色(0-10ppb、国際基準)、②黄色(11-50ppb、バングラデシュ基準)、③赤色(50ppb超)。黄と赤の証明書を受け取った世帯には安全な水源の場所をおしえるなど、改善にも取り組む。
- ✓ 1-2月フルスラ・ユニオンが各ワードに一人ずつ水供給担当者を選び、プロジェクトが彼らに研修を実施。彼らは、住民に近くの安全な水源の水質や場所の情報を提供し、不稼働水源の場合は修繕と取組み方法を話し合うとともにユニオン議会やAANとの連携にも力を発揮している。
- ✓ 2-3月は、ゴガ・ユニオンで5つの利用者組合が会合をもち、月々の水利用料金徴収、維持費、必要な改善と対処方法などについて話し合い。料金徴収に関しては支払い者の名前と支払い方法（現金か労働提供か物納かなど）を明記したリストを水源装置に取り付けることを自ら決定する。



(以下、10ページにつづく)

■クルナ管区の非感染性疾患に対するコミュニティ強化事業プロジェクト

- 3月8日 保健家族福祉省保健サービス局 (DGHS)の要請で前年11月から進めてきた非感染性疾患(NCD)現状調査をこの日いったん終了。ジェナイダ県カリゴンジ郡ロイグラム・ユニオンで、病歴を聴取したり、血圧、身長・体重・胴囲を測定・記録できた25歳以上の人数は11,127、調査対象者は推計13,586人だから達成率は82%。残りの2,459人(男性が2,147人で87%)は外国へ出稼ぎにいつているなどこのユニオンに住んでいない可能性も。12月14日にはDGHS幹部も視察、AANの調査方法をたたえる。
- 12月12日～1月23日 非感染性疾患の予防と症状確認におけるヘルスワーカーの任務に関する研修を、クルナ管区の9つの事業拡大ユニオンで実施。
- 12月20-21日 バングラデシュ・ベタール(唯一の政府運営ラジオ放送局)がプロジェクト活動地域を訪問、NCDのリスクを減らす番組を2件製作。3月20日と27日にNHKラジオで放送された。
- 3月5日 ワークショップを開き、非感染性疾患リスク要因確認キャンペーンに必要なツール一式(デジタル血圧計、身長測定器、体重計、胴囲測定用巻尺、BMIチャート)を、ジョソール・ショドル郡の19のユースクラブと8つのコミュニティクリニックに配布。このワークショップには郡長と郡保健家族計画局長も列席。郡長は「キャンペーンは農村部の住民が自分の健康状態を知る絶好の機会。この郡ではキャンペーンのためのスキルを上げる人が増え、NCD問題を削減することが期待される」と話す。

バングラデシュの

■思春期女子の栄養改善と健康推進プロジェクト

栄養フェア： プロジェクトを実施しているオバイナゴール郡プレムバードユニオンの7校で栄養フェアを開催(1月18日～3月20日)、計6,770人が参加。生徒らが希望者の血圧、身長・体重・胴囲を測定し、BMIの結果にもとづいて栄養やエクササイズなどについて助言も。

バザール・プログラム： 様々な食品の栄養素とともに家族の健康増進を促す栄養の必要性を大人の男性に理解してもらうため5つのバザールで集まりをもつ(12月から2月)。男性2,550人が参加。講義のほか、チラシも配布。



バザールの一角での男性集会



バザールでのチラシ配り



母親学級のーコマ

母親学級： 栄養に関する知識を習得し子供たちの食習慣を改善する目的で、6つの学校で母親学級を開催(1月～3月)。女生徒を早婚から守ることも話題に。

高校生の食生活調査： 高校生を対象に五食品群別摂取状況を調べたところ(2月8-26日)、2016年の調査時にくらべて26%の生徒にバランスの良い食事をするなどの改善が認められた。

栄養セミナー： ジョソール科学工科大学栄養学部でセミナーを開き(3月31日)、この1年間のチャレンジとプロジェクト成果を話し合い、改善策などを議論。学生たちには栄養に関する知識を多くの人と共有するよう勧める。

■ジナイダ県の地下水灌漑に依存しない持続的農業推進事業(略称"SAP")

AANは外務省・NGO連携無償資金協力の助成を受けて、昨年7月から3年間の予定でSAPプロジェクトに取り組んでいる。ジナイダ県はジョソール県の北側に位置し、そのNGOであるAIDおよび日本に本拠地をもつシェア・ザ・プラネットとの三者によるパートナーシップ事業で、AID傘下にある農業従事者を対象に持続的農法を促進するのが目的。AANの役割は、農業環境における砒素の動きを把握してAIDの促進する持続的農法が砒素汚染問題の解決につながるかどうか検証すること。

- 12月21日～1月6日 SAP事業地の3郡13ユニオンで灌漑井戸調査。対象となった128本のうち、砒素が0.01mg/Lもしくはそれを超えたのは94本(73%)、0.05mg/L以上は38本(30%)だった。
- 2月18日 ガンナ村にSAPプロジェクト最初の灌漑用深井戸を設置。
- 3月15-21日 横田漠代表が来バシ、灌漑井戸設置予定地を中心に144の土壌サンプルを採取。

～バングラデシュの活動報告 P8 のつづき～

■バングラデシュの高濃度砒素汚染地域における安全な飲料水の確保（略称”Multi GSF”）

地球環境基金の助成を受けて 2016 年 6 月から取り組んでいるプロジェクトで、高濃度の砒素を含む井戸水からバングラデシュの基準値内に砒素を除去するシステム（Multi-GSF）を設置して実効性を検証してきた。事業担当の矢野靖典理事らが 3 月 20 日砒素センターでワークショップを開く。DPHE や Multi-GSF のケアテーカー、NGO 活動家ら 30 人が参加し活発に意見を交換する。

事務局報告



ベンガル語のラジオで紹介されました。



AAN の非感染性疾患対策について、NHK 国際放送とバングラデシュのラジオ局がベンガル語の番組を作ってくれました。「日本・バングラデシュで健康分野のコラボレーション」2 回シリーズで 3 月 20 日と 27 日に放送されました。

この番組の提案者は NHK 国際放送局多言語メディア部の草谷緑さん。彼女は 2016 年に東京での講演会で AAN の活動を知り、番組を作ることを約束してくれました。

バングラデシュ側で番組を担当されたのは、タニア・ナズニンさんという日本の NHK でも勤務経験のある女性でした。バングラデシュ側で AAN バングラデシュのスタッフ、保健局の責任者、フィールドで働く保健局のワーカー、地域の女性たちなど、たくさんの方々に熱心に取材されました。専門家の榛澤さんと私も、しただけベンガル語で登場しています。

美しいベンガル語で、テンポよく情報が発信され、ラジオのすばらしさも再発見できるような質の高い番組に仕上がっています。緑さんとタニアさんというメディアの方に私たちの取り組みを知ってもらい、わかりやすい言葉で広く発信してもらえたことを大変光栄に思いました。

（東京連絡所 石山民子）

「グローバルリンク世界とつながっている私たち 2018～持続可能な世界を目指して」



3 月 17 日（土）宮崎市の宮交シティにて、ICNM 恒例イベント「宮崎から世界へ グローバルリンク世界とつながっている私たち 2018～持続可能な世界を目指して」を 2 年ぶりに行い、約 700 名の方にご参加いただきました。宮崎で有名なダンスチームによるパフォーマンスや、子どもたちによる英語のラポパーティ、高校生参加のバングラデシュ寺子屋体験、留学生シナさんによるベンガル語の歌と踊り、地雷撤去体験、そして、2017 年度で団体活動を終えられた宮崎国際ボランティアセンターの杉本サクヨさんによるトークショーなど、ステージイベント盛りだくさんでした。

今回は、AAN でインターンとボランティアをしている大学生 7 名が何ヶ月にも渡って企画し、当日の司会や夢についてのプレゼンテーション、また留学体験のポスター発表など大活躍でした。その他の各ブースでは、宮崎工業高校・宮崎大宮高校のボランティア部のみなさん、宮崎大学の学生さん、そして中学生がお手伝いくださり大変賑やかなイベントになりました。ありがとうございました。

私たち ICNM は、宮崎を拠点に国際協力を行う 4 団体、JICA デスク宮崎、宮崎大学 IRISH と連携して定期的に様々なイベントを開催しています。国際協力に興味のある学生さんたちだけでなく、一人でも多くの県民の方々に世界とのつながりや問題を知ってもらうことで、国際協力に理解ある地域へとますます発展していくことを目標に活動しています。

（宮崎本部 寺田佳代）

たくさんの方から会費、寄付をいただきました

Thank You

(2018年2月1日～5月7日 順不同・敬称略)

*匿名を希望される方は事務局までご連絡ください。

会費

青木 亘 安藤 和雄 岩松 研吉郎 川本剛 木村修二郎 工藤周一 末永和幸 高田順子 千葉正子 中野英幸
永山由美好 町田忠昭 宮田建生 横山 清一 (特活) 野の花館 浦部弘子 満倉忠勝 小原澤栄子 川原一之

寄付

亀田和久 木村修二郎 高田順子 榛澤完 下津義博 横田漢 川原一之 寺田佳代 NPO自動寄付のみなさま

2017年7月31日現在、正会員131名、賛助会員95名



寺田佳代

Kayogram

3

♡

♡

投稿 フォロワー フォロー中

八重桜、桃、藤、つつじ... etc
土呂久の春を味わってきました。
空気も景色も最高でした。

裏千家茶道のお稽古に通うこと丸10年。思うようなステップアップは出来ていませんが、「季節に合わせたお点前」や「掛け軸」「お茶花」「お菓子」で旬を感じられる茶室でのひとときがたまらなく好きです。皆さまも、時には抹茶を一服いかがですか？



『弄花香滿衣』(はなをろうすれば かおり ころもに みつ)

花をもてあそんでいたらいつの間にかその香りが衣に染みついていた。ただボーっと過ごすのではなく、自分から真摯に向き合う心を持つ。そうすればそのものに同化することができる。つまり、行動することで人は交わる友や環境によって様々な影響を受けることができるということ。(禅語。他解釈あり)



「弄花香満衣〜♪」到着してすぐに浮かんだ大好きな禅語。新緑の春、土呂久でお泊り女子会をしました。参加メンバーは、公私ともにお世話になっている、永野欣子さん、塩田幸代さん、小牧しおりさん、大柴薫さん。土呂久のマリ子さんと慎市さんが旬を感じるお煮しめや山菜のてんぷら、ジビエ料理など美味しいお料理をたっぷり準備してくださいました。初日は寒さを感じる雨だったので、土呂久山荘に到着してすぐに着替えて布団を敷き、持ち寄ったワイン十数本とおつまみを広げて女子会を開始。土呂久山荘の思い出から未来のこと、AANのこと、それぞれの悩みや今話題のネタなど夜中までひたすらお喋りして、日々のストレス発散をしました。いったいワインを何本飲んだかはご想像にお任せします。笑！！翌日は、マイナスイオンを浴びながら大きな石の上でマリ子さん手作りのお弁当をいただき、のんびり贅沢な時間を過ごしました。1990年に改築した山荘は古くなってきましたが、自然に満ち溢れた土呂久の風景は変わらず私たちの心を癒してくれます。2日間と短い時間でしたが、満開の花々や女子会メンバーと思いつきわむれて、たくさんの良い香りを衣につけて帰宅しました。楽しかった〜。マリ子さん、慎市さん、そして土呂久女子会のみなさん、ありがとうございました！また、土呂久で女子会しましょうね♪

国内の活動

- 12月 17日 「水資源管理共同管理研究会」(星槎大学助成)の活動にて琵琶湖東平野に調査(石山)
 -19日 福岡NGOネットワークFUNNさん来訪(宮崎NPOハウス)
 2月 2日 セミナー「アジア地域の水資源共同管理から展望する共生社会ー日本、タイ、バングラデシュの水資源管理の現場からー」
 2月 13日 にて(東京・渋谷 GEOC)石山が報告(表紙写真)
 2月 16日 JICA「安全対策研修」に横田、寺田、石山が参加(東京・市ヶ谷)
 3月 6日 「グローバル・ヘルスとNGO」成果シンポジウム(東京・新橋)にて石山が報告
 3月 17日 ICNMイベント「グローバルに世界とつながっている私たち 2018～持続可能な世界を目指して」開催
 (宮崎市・宮交シティ)
 3月 22日 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校SGH 担当者来訪(AAN本部)
 4月 11日 宮崎県環境管理課来訪(AAN本部)
 4月 17日 平成30年度地球環境基金助成金内定団体面談・説明会(川崎市)

2018年度 通常総会のご案内

5月27日(日) AAN 2018 年度通常総会

***正会員のみなさまへ**

日時: 2018年5月27日(日) 10時00分～12時00分

場所: NPOハウス 4階会議室(宮崎市鶴島2-9-6 TEL: 0985-20-2201)

議題: 2017年度活動報告、決算報告

2018年度活動計画(案)、予算(案)など

*正会員の皆さまには、往復はがき又はご登録いただいているメールアドレスにご案内をさせていただきました。

5月17日までに出席をご返送くださいますようお願い申し上げます。委任状の送付もお待ちしております。

寄付のお願い

◆ 一般寄付

用途を限定せずに、啓発・研修などの活動のほか、事務局運営費として使われます。

◆ 医療協力

砒素中毒患者の治療薬・手術費用に使われます。【例 角化症を緩和する軟膏 1カ月分 400円/人】

◆ 友好の水

安全な水を供給する水源設置に使われます。【例 池の水の浄化装置 200,000 / 70世帯】

お仲間になりませんか？

私たちの活動にご興味を持たれ、ご賛同いただけましたら、ぜひ会員としてご登録ください。一緒にアジア各国へ安全な水を届けましょう！

正会員	年間	5000円(個人に限ります。総会での議決権を持ちます)
賛助会員	年間一口	3000円

※宮崎事務所へご連絡いただければ、AANパンフレットと振込票をお送りいたします。

ゆうちょ銀行振込口座 01980-8-6026 口座名 アジア砒素ネットワーク

特定非営利活動法人 **アジア砒素ネットワーク**(問い合わせ先)本部事務所 〒880-0014 宮崎市鶴島2丁目9-6みやざきNPOハウス208号
TEL 0985-20-2201 FAX 0985-20-2286

E-mail: aanm2201@miyazaki-catv.ne.jp URL: http://www.asia-arsenic.jp/

ダッカ事務所 House No.46(Apt.4B), Road No.13/C, ADD-Xenia, Block-E, Banani, Dhaka-1213, Bangladesh
TEL +880-2989-4493